

2021年8月21日

戦争を繰り返さない責任

立命館慶祥中学校・高等学校

校長 江川 順一

生徒の皆さん、この夏季休業中、教員2名、生徒4名から、新型コロナウイルス感染症にかかわって、PCR検査結果の陽性報告がありました。夏休み中であつたので、幸いにも校内での濃厚接触者はありませんでした。

昨日の北海道の新型コロナ感染者数は523人となりました。現在、道内においては、検査数の85%以上がデルタ株に置き換わり、感染拡大が進んでいます。全道の感染者状況を見ても、夏休み中の学校関係者の感染者数は、昨冬や昨夏の長期休業期間よりもかなり多かったことがわかっています。8月に入り感染者数が増加し、5月末の道内最大感染者数である727人に迫る勢いであることから、現在、北海道石狩地方には蔓延防止等重点措置が発令されておりますが、9月12日まで延長となりました。昨日からは夏休みが明け、慶祥も学校教育活動が再開されました。生徒の皆さんは、一層の感染予防に努めるようお願いしたいと思います。

学校で体調に異変を感じた場合は、すみやかに保健室に行ってください。家庭や寮で、少しでも体調に異変を感じた場合は、学校には来ないこと。これが大切です。まず、登校を見合わせて様子を見てください。体調不良を我慢することは決してしないでください。そのことが、あなた自身の、そして大切な人の健康と命の安全を守ることになります。

その上で、新型コロナの感染者が、慶祥関係者に出ることがあったら、立命館慶祥に学ぶ者として、慶祥生として、そのことへの態度や姿勢が試されているということを、改めて認識してください。一番傷ついているのは、感染した当事者です。偏見、誹謗中傷、不要な詮索、SNSでの情報拡散、これらを厳に慎むことをお願いしたい。慶祥生のあなたに、品位と誇りをもった行動を心から期待します。

さて、8月15日には、全国戦没者追悼式がありました。立命館慶祥の夏季休業明け全校集会では、毎年「戦争と平和」について考えています。今夏も19日の全校集会において私が話したことに基づき、ここではもう少し丁寧に、あなたと一緒に考えてみたいと思います。

76年前の1945年8月6日、原子爆弾が広島に投下され、続いて9日に長崎にも投下されました。そして、8月15日、1939年から6年余りに亘った第二次大戦が終わりました。

戦後、立命館学園は、この戦争に際して、多くの学生を戦場に送ったことを猛省し、戦争は二度と起こしてはならないという固い決意から、憲法と教育基本法に基づく「平和と民主主義」を教学理念として掲げました。この教学理念は、建学の精神である「自由と清新」同様、立命館学園が最も大切にしている、教育の礎です。

昨夏の全校集会において、私は「戦争と平和」を考える方法として、立命館アジア太平洋大学（APU）の出口治明学長の「私たち人間にとって、教材は過去しかないのだから、リーダーは常に歴史に学ぶべきであ

る」という言葉を紹介しました。出口学長は、歴史に向き合い、歴史から学ぶことにより、将来に活かすことの大切さを説いています。私たちは、日本が戦争を開始する過程をつぶさに振り返り、国民の熱狂的な支持によって第二次世界大戦に突入していった「歴史的事実」を踏まえた上で、戦争のない世界を築かなくてはなりません。

今日の話のテーマは、「戦争の被害者と加害者」です。

戦争には、まず「被害者の側面」があります。

戦争を扱った長編アニメーション映画の名作に、『この世界の片隅に』（公開 2016 年、再編集『この世界の（さらにいくつもの）片隅に』公開 2019 年）、『火垂るの墓』（公開 1988 年）があります。前者は比較的最近公開された、戦争アニメの名作です。18 歳の主人公ですが、広島県呉市（広島市の隣町）において、ごく平凡な女性が戦時において必死に生きる姿を扱いました。後者は知らぬ者のない、戦争アニメの古典です。登場人物は、14 歳の兄の清太と 4 歳の妹の節子。神戸大空襲における兄妹の死別と清太の死を扱いました。

二つの作品は、ともに戦争の悲惨さや不条理を訴えています。これらを観賞した私たちは、戦時下であっても苦勞を黙って引き受けるすずの健気な姿に感動し、息を引き取った清太の「財産」がサクマ式ドロップの缶に入った節子の遺骨だけであったことに涙を流すのです。私たちは名作アニメに感情移入し、被害者として戦争の意味を考えようとしています。

一方、戦争には「加害者の側面」もあります。

1930 年代末、朝鮮への植民地支配による「創氏改名」（日本式の名前を無理矢理つけさせた）などの同化政策、労働者の日本本土への強制連行、戦争末期の徴兵制の適用。また、東南アジアの占領地であったシンガポールやマレー半島、フィリピンにおいて住民への残虐行為や捕虜を含む強制労働が多発し、住民の激しい反感を呼んだのです。1937 年からの日中戦争についても、言うに及ばずです。

日本は、世界で唯一の被爆国であることから、戦争被害者としての側面が強調されがちですが、同時に加害者としての側面を考えなければいけません。被害と加害とは、単純な二分法で分けられるものではなく、あたかもパイ皮のように重層的に重なり合っています。戦争の当事者同士の関係になると、被害者であるとともに、加害者である場合もあるのです。この場合、単純な被害と加害との二項対立では説明できないため、被害と加害との重層構造を見極めなければなりません。そのためには、関係者の証言を積み重ね、客観的な視点から冷静に歴史を見詰めることが必須となります。

2010 年に慶祥を卒業した佐藤花さんという卒業生は、弁論部に所属していましたが、戦争の歴史について調べ、沖縄戦の経験者や北方領土の元島民ら、多くの人に直接取材しました。その取材を基に多くの弁論大会に出場し、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・椎尾弁匠記念杯などの賞を総なめにしました。佐藤さんは、立命館大学に進学してからも取材を続け、今はテレビ番組制作会社に勤めていますが、ライフワークとして「戦争の記憶を後世に語り継ぎたい」と述べています。このことが、8 月 14 日の道新に大きく取り上げられました。

佐藤さんには、ぜひとも、関係者に直接取材した証言を積み重ね、客観的な視点から歴史を見詰め、伝える取組に、これからも挑戦し続けてほしいと願っています。

ちょうど1年前の全校集会において、広島にある原爆死没者慰霊碑の石碑に刻まれている、「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返させぬから」という言葉を紹介しました。私たち大人はもちろんですが、あなたにも、戦争を繰り返さない責任があるのです。このことを、忘れないでください。

さあ、あなたは今日の話をお聴いて、どのような行動を起こしますか。

札幌出身、記憶の継承目指す 佐藤花さん

客観視した歴史伝えたい



「みんなに戦争の歴史を考える時間を持ってほしい」と訴える佐藤花さん

「戦争の記憶を後世に語り継ぎたい」。札幌市出身の佐藤花さん(22)。今、東京でテレビ番組の制作会社に勤めながら、戦争の歴史について調べて発信する学生芸員を目指している。

2014年、立命館慶祥高(江別)に入学。弁論研究部に入り、戦争に関連した題材を調べ始めた。きっかけは、祖父の兄が沖繩戦で戦死していたことだった。高1の時、資料を集めに沖繩を訪問。元ひめゆり学徒隊員に話を聞いて

た。集団自決のむごさを知った。一方で、戦争で家族を失いながらも「命どう宝(命こそ宝)。命は平等です」と語り、沖繩戦で亡くなった米兵の鎮魂を願う元隊員にも出会った。被害者と加害者に単純化しない捉え方に、心を動かされた。高2の時には、北方領土のビザなし渡航に参加。旧ソ連軍の侵攻で故郷を追われた元島民に思いをはせ、草に覆われた現地の墓地の様子などを見た渡航体験を、高校生弁論大会で発表

し、最優秀賞を受賞した。弁論を聴いた元島民の女性から「うれしかった。今の若者に伝えてほしい」と涙ながらに言われ、歴史の継承の大切さをあらためて感じた。立命館大文学部(京都)に進学後も戦争研究を続けた。高校から大学にかけて、北方領土の元島民や沖繩戦経験者ら取材した人数は約20人。戦争の歴史と向き合いつづけてきた。そんな中、歴史は情緒的に脚色される危うさがある

ことも知る。大学時代に調べた、終戦直後に日ソ両軍が激戦を繰り広げた北千島・シムシユ島(占守島)の戦い。ソ連軍が無警告で上陸してきた中、「自衛行動」として戦闘を決断した樋口季一郎陸軍中将(1888~1970年)の孫隆一さん(75)「東京在住」を取材した。樋口中将の遺稿になかった戦闘命令のせりふが、後の文献で加筆されたことがあったという。佐藤さんは「事実を確かめることが重要」と歴史を伝える時の大前提を心に留めた上で、戦争を知らない世代だからこそ「歴史を客観視して伝えるのが、私たち世代の役割かもしれない」と言った。今、社会人1年目の慌ただしい日々を送る佐藤さんだが、これまでの取材内容を文字にしたり資料を読んだり、時間を捻出して勉強を続ける。近い将来の夢は博物館などの学芸員。それは「子どもや若い世代に戦争の歴史を伝えたい」からだ。

(岩崎志帆)

【2021年8月14日付け北海道新聞より転載】